

研究タイトル：『地域共生社会』の実現に向けた社会関係資本の実証的研究

代表研究者：塚本 利幸(福井県立大学看護福祉学部教授)

1. 調査・研究プロジェクトの全体像

調査・研究プロジェクトは、Ⅰ. 地域共生社会の概念的な検討、Ⅱ. 調査仮説の構成のためのインタビュー調査の実施、Ⅲ. アンケート調査の実施と分析（仮説の検証）、Ⅳ. 分析結果の解釈の妥当性の検討のためのインタビュー調査の実施と調査結果の共有と課題の明確化のためのワークショップの実施、という構成になっている。概念的な検討は、全期間を通しておこなわれ、残りのⅡ～Ⅳの部分は時系列的に順次実施されていく。

質的調査によって得られた知見にもとづいて調査仮説を構成し、量的調査を実施し、統計学的手法によって、仮説の一般性を検証し、分析結果の解釈の妥当性を、再び質的調査を通して検討し、調査結果の共有、課題の明確化のためのワークショップを実施するという手順で調査・研究プロジェクトは進められた。

今回の報告では、アンケート調査の分析結果を中心に、既存の社会関係資本の在り方と孤独感、メンタルヘルスとの関係を検証し、地域社会を誰にとっても暮らしやすいものにしていくために、どのような関係性の創出が望ましいかについてのヒントを探っていく。

2. 「暮らしやすい地域づくりに関するアンケート」調査の概要

上記の調査・研究プロジェクトの一環として、ダークサイドを含めた地域の社会関係資本の在り方と、地域住民の抱える孤独感や精神的な健康度（メンタルヘルス）の関係を検証し、地域社会を誰にとっても暮らしやすいものにしていくために、どのような関係性の創出が望ましいのかについてのヒントを探る目的で、坂井市在住の一般住民を対象としたアンケート調査（暮らしやすい地域づくりに関するアンケート）を実施した。

アンケート調査の実施に先立って坂井市の4つのまちづくり協議会と同地域の福祉の会のメンバーにインタビュー調査をおこない、その内容をもとに社会関係資本と地域のあり方の関係についての調査仮説の構成を進め、仮説の検証が可能な調査票を設計した。

アンケート調査は、18歳以上の坂井市在住の一般住民（外国籍を含む）から単純無作為抽した4000人を対象に郵送法（web上での回答を併用）で、2024年2月から3月にかけて実施した。有効回収数は1593件、回収率は39.8%であった。

3. 精神的な健康度（メンタルヘルス）と孤独感

精神的な健康度の測定には、GHQ12（General Health Questionnaire 12項目版）を使用した。GHQ12は12点満点で、精神的に不健康であるほど高得点になり、一般に4点以上のものが精神的で不健康であると定義される。

孤独感の測定には、日本語版 Short-form UCCLA 孤独感尺度（第3版）10項目版を使用した。孤独感尺度は10点から40点の範囲をとり、孤独感が強いほど高得点になる。今回

の分析では、得点上位 4 分の 1 (25 パーセント) にあたる 25 点以上のものを高得点群とした。

GHQ12 の得点と孤独感尺度の得点には、0.1 水準で有意な正の相関 ($p = 0.412$) があり、孤独感を抱え込んでいるものほど精神的に不健康な傾向があることが確認できる。精神的に健康なもの者に比べて、不健康なものは孤独感の高得点群が 3 倍以上も多い。

4. メンタルヘルス、孤独感と基本属性の関係の分析

性別との関係については、精神的に不健康なものの割合は、女性の方が 1%水準で有意に高く、孤独感が強いものの割合は、男性の方が 0.1%水準で有意に高い。

年代との関係については、精神的に不健康なものの割合は、若年層 (18~39 歳) で 1%水準で有意に高く、高齢層 (60 歳以上) で 1%水準で有意に低い。孤独感の強いものの割合は、壮年層 (40~59 歳) で 5%水準で有意に高く、高齢層で 5%水準で有意に低い。

婚姻状況との関係については、精神的に不健康なものの割合も、孤独感の強いものの割合も、結婚しているもので低く、結婚していないもので高い (1%水準で有意)。

子どもの有無との関係については、精神的に不健康なものの割合も、孤独感の強いものの割合も、子どものいるもので低く、いないもので高い (1%水準で有意)。

5. メンタルヘルス、孤独感と対人関係、加入団体のパターンとの関係

精神的に不健康なものの割合も、強い孤独感を抱いているものの割合も、気がねなく相談できる人が多いほど、低い (1%水準で有意)。

精神的に不健康なものの割合も、強い孤独感を抱いているものの割合も、どの団体にも入っていないもの (不加入) で高く、選択縁団体加入【地縁団体には不加入】、と両団体に加入で低い (1%水準で有意)。

6. メンタルヘルス、孤独感と社会関係資本の関係

社会関係資本に関する因子を抽出するために、いくつかの質問項目に関して、因子分析を実施し、「ネットワーク」、「互酬関係」、「ソーシャルサポート」、「一般的信頼」、「互酬性の規範」、「特定化信頼」、「関係形成評価」、「寛容性評価」、「因習性・男尊女卑」、「しがらみ・同調圧」、「プラス評価」、「地域愛着・暮らしやすさ」、「地域関係性プラス評価」の 13 の因子を抽出した。

社会関係資本に関する因子が、メンタルヘルスや孤独感にどのように影響しているのかを確かめるために、GHQ12、孤独感尺度の値を従属変数、社会関係資本に関する諸因子を独立変数にした重回帰分析をおこなった。多重共線性の問題を回避するために、相関係数が 0.5 以上の値をとらないよう因子を選択して投入した。メンタルヘルス、孤独感への影響が確認された「個人的なことでも気がねなく相談ができる人の数」、「団体加入のパターン」に関しても、独立変数として投入した。

GHQ12の得点を従属変数にした重回帰分析からは、地域社会に人間関係のネットワークを持っており、他者を信頼しており（社会関係資本の光の面）、気がねなく相談できる相手が多いものほど、メンタルヘルスが良好な傾向が確認される。社会関係資本のダークサイドに関しては、地域社会が不寛容（≡選択縁的な関係の創出が困難）で、しがらみや同調圧が強い（≡因習的で男尊女卑的）と感じているものほど、メンタルヘルスが悪化する傾向がみられる。団体に加入していないものに比べて、選択縁的な団体に加入しているものは、メンタルヘルスが良好な傾向がみられる。

孤独感尺度の得点を従属変数にした重回帰分析からは、他者を信頼しており（社会関係資本の光の面）、困りごとがあった時にサポートが受けられており、気がねなく相談できる相手が多いものほど、孤独を感じていないという傾向が確認される。社会関係資本のダークサイドに関しては、地域社会が不寛容（≡選択縁的な関係の創出が困難）で、しがらみや同調圧が強い（≡因習的で男尊女卑的）と感じているものほど、孤独を感じやすい傾向がみられる。

GHQ12の得点が4点以上の精神的不健康者、孤独感尺度の得点が上位4分の1以上のもの（高得点群）に社会関係資本がどのように影響しているのかを確かめるために、ロジスティック回帰分析も実施したが、上記の重回帰分析とほぼ同様の結果が検証された。

メンタルヘルス、孤独感と社会関係資本の関係の分析からは、社会関係資本の肯定的な面に関して、地域社会に人間関係のネットワークを持っており、他者を信頼しているものほど、メンタルヘルスが良好で孤独感を抱え込みにくいという傾向が確認できる。社会関係資本のダークサイドに関しては、地域社会が不寛容で、しがらみや同調圧が強いと感じているものほど、メンタルヘルスに不調を抱え込みやすく孤独感も強いという傾向が確認できる。肯定面とダークサイドを比較すると、肯定面のプラスの作用に比べて、ダークサイドのマイナスの作用の方が深刻であることがうかがえる。

個人的なことでも気がねなく相談できる相手の存在、興味・関心や価値観の共有による流動性の高い選択縁的な関係性、がプラスの方向に影響することも確認できる。

血縁・地縁による結びつき（選択性が低い結束型の閉じたネットワーク）が強い地域で、そうした結びつきからこぼれ落ちた場合、興味・関心、価値観の一致などによる新しい結びつきの形成が困難だと、メンタルヘルスが悪化し、孤独感が強まりやすいという可能性が示唆される。

7. クラスタ分析の手法によるまちづくり協議会のグループ分け

23のまちづくり協議会を社会関係資本の在り方を基準にしてグループ分けする目的でクラスタ分析を実施した。まちづくり協議会を単位として、因子分析によって抽出された13の因子の因子得点の平均点を算出し、その得点を用いて階層クラスタ分析を実施した。分析結果のデンドログラムの形状から、3つのクラスタへの分割を採用した。

3つのクラスタの社会関係資本の在り方の特徴を把握するため、クラスタごとに13

の因子の個人ベースの因子得点の平均値を算出し、偏差値を求めた。

クラスター1は、新しい人間関係が形成しやすく、他者に寛容であり、因習的でも男尊女卑的でもなく、しがらみや同調圧が少ないと住民によって評価されている。社会関係資本の肯定的な側面に関しても充実しており、社会関係資本に関してバランスの取れた理想的なパターンのグループであると考えられる。

クラスター2は、すべての要素が平均を下回り、社会関係資本の肯定面もダークサイドも希薄である。良くも悪くも社会的な結びつきが乏しいグループであると推察される。

クラスター3は、新しい人間関係が形成しにくく、他者に寛容でなく、因習的で男尊女卑的で、しがらみや同調圧が強いと住民によって評価されている。一方で、社会関係資本の肯定面に関して、人間関係のネットワークが充実しており、住民が互いに助け合い支え合う関係性も構築されている。顔の見える間柄での信頼関係も強い。結束型の閉じたネットワークの強いグループであると推察される。

社会関係資本の在り方について理想的なパターンを示したクラスター1は、GHQ12の得点も孤独感尺度の得点も平均値を下回り、良好な状態の住民が多いことが推察される。社会的な結びつきが希薄であると予想されるクラスター2では、どちらの得点も平均的である。結束型の社会関係資本が強いことが推察されるクラスター3は、孤独感尺度の得点が平均値を下回る一方で、GHQ12の得点は平均値を大きく上回り、精神的な健康度の低い住民が少なくないことがうかがえる。

8. まとめ

誰にとっても暮らしやすい地域づくりに関して、人間関係のネットワークの構築、信頼関係の醸成、相談にのってもらえる、具体的な手助けが得られるといったサポートの提供主体の確保などが必要であり、個人的なことでも気がねなく相談できる関係性が、特に、重要であることが確かめられた。坂井市のような定住性の高い地域でも平成以降に造成された新興住宅地では、そうした関係性（社会的な結びつき）が希薄であることが確認された。

一方で、人間関係がタイトすぎて、社会関係資本のダークサイドである同調圧や相互監視にさらされると個人ベースでも地域ベースでも逆効果になってしまうことも明らかになった。団体に加入していないものに比べて、メンタルヘルスが良好で、孤独感が薄いものは、興味、関心や価値観の共有による選択縁的な団体に加入しているものであることから、地縁や血縁による結束型の閉じたネットワークに加えて、選択性や流動性の高い架橋型の開いたネットワークを醸成していくことが効果的であることが示唆される。